

月のさす窓もなければ、晝でも薄暗いのだ。

やうやく兩手の這入る穴から、お碗と箸を誰かど入れたやうだ。

僕は其のお碗を伏せて、カボカボ板の間を叩いた。

果ては割れて缺けて了つた。

女がやつて來ないのが不思議だ。

僕は着てゐる着物の袖を引きもぎ、インパネスの裏地の甲斐絹も引き裂いて了つた。

罌丸が腫れ上つたやうだ。

冷い板の間に坐つてゐるので、罌丸炎になつたのかも知れない。

淋毒が頭へ上つても發狂する恐れがある。

僕はそれで、スベ／＼した甲斐絹で、罌丸を固く包んで禪を締めた。

何たる罪に問はれてゐるのか。

僕は喘ぐやうに苦しんだ。

肝臓の組織や、細胞が變つても、僕の知つた事ではない。